

世界の難民情報を伝える

UNHCR NEWS

United Nations High Commissioner for Refugees

Number

6

MAY 1998



Contents

Special Report

生活再建をめざして
ミャンマーに戻った
イスラム系住民を支援する

開けた未来

Update

世界各地の難民状況

Campaign Report/Information

全日本新体操クラブ連盟 「'97イオンカップ世界新体操クラブ選手権」

チーズ普及協議会・日本輸入チーズ普及協会 「チーズフェスタ'97」

世界連邦宣言自治体全国協議会 「自治体職員一人100円募金」

日米アースアクセス委員会 「5000個の募金箱を全国に」

日本女子テニス連盟 「国連難民対策募金」

お便りから



UNHCR

国連難民高等弁務官 日本・韓国地域事務所

生活再建をめざして

ミャンマーに戻った イスラム系住民を 支援する

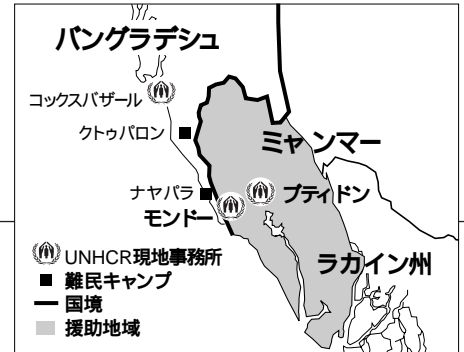
UNHCR ミャンマー事務所
中村 恵

現在、アジア地域にいる難民・避難民は約800万人。その中で、少しずつ本国に帰還し、解決に向けて動いているのがミャンマー難民だ。今号では、帰国した人々が故郷で定着し再び難民にならないための援助活動を、日本人職員の取り組みを通して紹介したい。



橋のない川では船に自転車を積んで渡る。向かって左端が著者。

ミャンマー(旧ビルマ)の首都ヤンゴンから私の任地であるモンドーへの道のりは長い。まず飛行機で北西へ1時間、バングラデシュとの国境にあるラカイン州の州都シットウェに飛ぶ。次にスピードボートで川を北上すること3時間半、プティドンの波止場へ。そこから車で45分、ようやくUNHCRモンドー事務所兼職員宿舎にたどり着く。



1997年12月7日、まだ真夏のような暑さのヤンゴンをたち、初めてモンドーにやってきた。すでに乾季に入っているとはいえ、緑豊かな土地だ。夕方には少し肌寒い程だった。

仏教国という印象の強いミャンマーだが、このあたりには約80万人のイスラム教徒が住んでいる。1991年から92年にかけて、そのうち約25万人が難民となってバングラデシュ側に流れ込んだ。ミャンマー・バングラデシュ二国間合意を経て97年8月までに約23万人が帰還した。現在は、彼らの生活を再建し、地域への再定着をはかる小規模プロジェクトが進められている。

フィールド担当官として、私はモンドー南部地域を受け持つことになった。

帰還民の住む村へ

着任してまだ一週間もたない頃、3泊4日のフィールド訪問に出かけた。まだ道路や橋が整備されていない村に入るため、車では途中までしか行けない。そこで自転車を積み込んだ。食糧、水、寝袋を準備し、ミャンマー人職員と共にいざ出陣。

干潮の時を狙ってまず車で海岸線を南下し、最南端の村に向かった。約4時間のドライブの果て、夕方、コータンカウ村に着いた。ココナツの木などに囲まれた村から見る夕日が美しい。しかし日が沈んでしまうと、ロウソクと懐中電灯だけが頼りになった。

それから3日間、竹製の民家に泊ま



ガンチャン村の簡易ダム。雨季になるとこの堤防は流されてしまう。

り、自転車で村から村を巡った。荷物は移動の度にポーターを雇い、運んでもらう。次の目的地への連絡も、村人を雇って走らせる。5か村を訪ね、7か所で集会を開いた。

この地域には稲作と漁業以外にたいした産業もない。そこでUNHCRの自立支援プロジェクトのひとつとして、土地も船も持たない人々の中から7人組を15グループ作り、分割払いによる返済を条件に小型の船と網を買い与えることになった。この最初の15グループからの返済金は、そのまま新しい17人組へと引き継がれるという手はずだ。その後、紆余曲折はあるものの、各グループからの返済は続いている。

ところで村境にはしばしば川が流れている。たいてい橋は架かっているのだから、その細さにギョッとする。平均台を少し太くしたような木が渡してあるだけなのだ。時には手すりさえない。こんな“橋”を村人は重い荷を背負い裸足やゴム草履ですいすい渡っていく。私はひたすら目の前の一步に意識を集中し、無我夢中で渡った。

UNHCRは道路や橋の整備も支援している。いつの日か、すべての川に橋が架かり、車でラカイン州都のシットウェまで行けるはずなのだ。

ミャンマー人の職員と苦楽を分かちあい、私は必死のやせ我慢ですべての行程を乗り切った。振り返ると、結構楽しかった。しかし、モンドーの宿舎に戻るとほっとした。最初は

ひどいと思った自分の部屋のベッドで、久しぶりに安らかな眠りについたのだ。

宿舎では単身赴任の同僚たちと共同生活を営んでいる。イタリア、フランス、クロアチア、エチオピア、スーダン、マラウイ、中国、フィリピン、ベトナム系アメリカ人ときわめて国際色豊かだ。朝食はそれぞれにとるが、昼食と夕食は同じ食卓に着く。ビデオを見る以外にはたいした娯楽もない。私は気の合う同僚と異文化談義を楽しんだり、外に散歩に出かけたりしている。

難民の再流出を防ぐ

雨季を前にした5月頃からは緑の田園風景が広がるそうだが、それまでは見渡す限り荒れ果てた田んぼが広がっているだけ。雨季の間に水を溜めておく設備がないため、乾季には水がなく一毛作しかできないのである。そのため、乾季の終わり頃には主食である米が不足してしまう。そ

の頃にバングラデシュへの流出がよく起きる。

UNHCRは米不足を解消するためにさまざまな対策を実施している。

WFP(世界食糧計画)と協力して、女性や子ども対象の識字教育プログラムへの参加者には奨励米が配られている。土木作業に参加する村人への報酬を米で払うこともある。また簡易ダムの建設、ポンプの貸し出しなどを通して、二毛作の促進を計っている。

私の担当地域の北端にガンチャンという村がある。「かつて日本軍はここまで北進し、行く手をイギリス軍に阻まれたのだ」と地元の職員が教えてくれた。日本人として奇妙な縁を感じた。この村にもUNHCRの援助で簡易ダムが造られたが、雨季には流されてしまうという。本格的なダムを建設できなければ、来季は村民たちの力で簡易ダムを造るしかないだろう。

結局、この地域の開発は難民流出の予防に不可欠なのだ。そこでUNHCRは、UNDR(国連開発計画)やNGOに活動を引き継げるよう努力を続けている。

しかしながら、イスラム系住民はミャンマーには戻ったものの、今なおミャンマー国籍を認められていないという問題がある。そのため、移動・教育・就業などの面で不自由を強いられている。国家の保護を受けられない人々を保護するUNHCRは、まだお役ご免とはいかないようである。



女性のための識字教室。ベンガル方言を母語としているためミャンマー語の会話や生活に欠かせない「数字」から学んでいる。

開けた未来

UNHCR ミャンマー事務所 フィールド担当官
齊藤香織

アミダ・カトさん(37歳)はUNHCRが行なっている自立支援プロジェクトで成功した女性の一人だ。彼女は、私が担当するブティドン郡のチャウヤン村に住んでいる。村を訪ねた時、彼女はその経験について欠けた歯を見せながら人懐っこい笑顔で語ってくれた。

夫を早くに亡くし、女手一つで子ども二人を育ててきた彼女は、バングラデシュの難民キャンプから自分の村に帰ってからのというもの、必死で働いた。キャンプから出る時に貰ったお金は、家を建て、食べ物を買って消えていった。竹をなめして敷物を作ったり、他人の家を掃除したり、洗濯などの家事を手伝っては家計を支えてきたが、どれもわずかなお金にしかならない。

訪れた転機

そんな時にUNHCRから「もし5000チャット(約2000円)あったら何をするか」という話があった。それで彼女は小さな店を持ちたいという、自分の夢を語ったそうだ。敷物売り買ひする方が活動的な自分に合っていると感じたからである。

1996年半ば、アミダは試験的に行なわれた自立支援プロジェクトの5人組の一員に選ばれ、5000チャットを支給された。「お金を貰った時にUNHCRの人に二つの条件を言われました。ひとつは食べ物に全部使ってしまうわないこと。もうひとつは二週間に一度、グループで集り各自200チャットずつ出し合い、その合計を一人ずつ順番に取っていくということです。」アミダに異存はなかった。

5000チャットというお金は、日本では僅かなようであっても、日雇いの男性が一日に稼げる収入が平均150

チャットというこの地方では大変な額だ。アミダは自分の家のわきに人が一人やっと入れるくらいの店を出した。周囲のイスラム教徒の女性たちが外を歩くのをためらう中、アミダは町へ積極的に買い出しにでかけ、野菜やタバコ、揚げ菓子、米など店で扱う物を少しずつ増やしていった。グループの中ではリーダーとなり、他の女性たちと助け合いながら店を続けていった。

「出来ないことはないの」

商才がもともとあった彼女は、少しずつ利益を伸ばしていった。援助された元手を利用してお米を安く買っては農家に貸し、収穫が終わってから返してもらうという土地特有の商売も始めた。お金持ちの農家ではよくあることだが、女性でそれも未亡人で始めたのは、アミダと彼女のグループが初めてである。

「子どもを学校にやる余裕もできました」と私に語るアミダは、自分で自分の生活を切り開いたのだという自信に溢れている。そしてこのプログラムに新たに参加する女性たちが真剣に聞き入る中、彼女はこう語った。「一生懸命、毎日働くの。のんびりしてはだめ。大変なことは沢山あるけれど、出来ないことはないの。この機会を活かすのよ。」

ミャンマー難民の自発的帰還 UNHCR・WFP(世界食糧計画) 共同アピール (97年12月)

1998年度予算(米ドル)

ミャンマー国内	
食糧	750,000
輸送・補給	706,000
日用品・世帯扶助	204,100
水	96,500
衛生	80,000
保健	298,000
住居・その他の施設	92,400
コミュニティ・サービス	149,000
教育	449,000
穀物生産	1,054,000
家畜・畜産	103,500
漁業	100,000
植林	87,800
自立支援(収入確保)	434,000
法的扶助・保護	68,600
実施機関運営支援	2,228,000
UNHCR事業運営費	3,140,000
小計	10,040,900

バングラデシュ国内

小計	4,080,981
----	-----------

UNHCR本部運営・管理費

小計	1,426,384
----	-----------

合計	15,548,265
----	------------



UNHCR

貧しい家庭では、わずかな授業料もはらうことができず、また、子どもたちは大切な働き手でもある。UNHCRは、学校建設や特別講座の開設、登校した子どもの家庭に援助をだすことによって、子どもたちの就学機会を増す努力をしている。開校式で子どもたちの出迎えをつける著者。

Update

世界各地の 難民状況

詳細はインターネットの
ホームページ(英語版)をご覧ください

<http://www.unhcr.or.jp>

UNHCR、 ソマリア計画へ 2400万ドルの拠出を アピール

UNHCRは4月3日、1998年度のソマリア計画に対し2400万ドルの拠出アピールを行なった。

1989年に始まったソマリア内戦を逃れた難民の大部分は、エチオピア(98年1月1日現在24万人)とケニア(13万4000人)にいる。一部はジブチ、イエメン、リビアに逃れた。

97年にはUNHCRの試験的な計画で、主にエチオピアのハルチシェイク・キャンプから難民1万1000人が帰還。また今年にも8000人が帰還支援を受けた。98年中にエチオピアから6万人、その他の国々から1万6500人がソマリア北西部に帰還する見込み。

ソマリア南部では、帰還の条件が整っていない。ケニアからの同地域への早期帰還も、昨年10月以来の大雨と洪水で見通しが立たなくなった。キスマヨ地域では新たな武力衝突が伝えられ、流出も続いている。

(98年4月3日現在)

UNHCR、 強制送還の中止と 庇護希望者への接触を マレーシアに要請

UNHCRは3月28日、マレーシア政府に対し、インドネシア・スマトラ島のアチェ州出身者を強制送還しないよう要請した。同国にいるアチェ出身者がUNHCRに難民の地位を申請している。

「送還者のなかに、国際的保護が必要な真の難民がいる可能性があるため、非常に憂慮しています」と、緒方貞子高等弁務官は述べた。

またUNHCRは、数千人の不法入国者を収容しているセンターへの立ち入りを認めるよう重ねて要請した。収容者の中には約500人のアチェ出身の難民・庇護希望者がいるみられる。

3月下旬、不法入国者多数を本国送還するというマレーシア当局の決定のため、同国の数か所の収容センターで暴動が起り、少なくとも9人が死亡し、多くの負傷者が出た。UNHCRは事態を憂慮している。

(98年3月28日現在)

カレン族難民キャンプ、 攻撃される

3月15日、ミャンマー出身のカレン族難民を収容するタイのキャンプが砲撃された。UNHCRは同事件を強く非難した。

タイ軍部は、タイ西部にいるカレン難民9万5000人のうち約3万人が収容されているマエ・ヒア・キャンプが攻撃されたと確認した。砲撃で少なくとも2名(難民1名とタイ兵士1名)が負傷。11日にも、ファイ・カロック・キャンプが襲撃され、難民3人が死亡、40人以上が負傷した。

さらに3月22日には、国境近くのマウカー・キャンプが砲弾と手榴弾による攻撃を受けた。14人が負傷し、50戸以上の住居が全焼した。UNHCR職員2名が現地入りして調査中。

UNHCRはタイ・ミャンマー国境地域では活動していない。以前から、カレン族難民への定期的な接触をタイ政府に働きかけてきたが、政府も、彼らへの支援をUNHCRに要請するかどうか、正式には決定していない。

(98年3月24日現在)

緒方高等弁務官、 旧ユーゴスラビアを訪問

緒方難民高等弁務官は、旧ユーゴスラビアを4月3日から2週間にわたって訪問した。

スロベニアで同国大統領と会談ののち、ボスニアのサラエボを訪れ、4日、日本の小淵外相とともに、バニャ・ルカ地域で復興支援のUNHCR計画の実施状況を視察。

7日、クロアチア政府首脳と会話し、セルビア人少数派の帰還手続きを簡素化・スピードアップするよう要請した。セルビア人は、クロアチアへの未帰還難民の中で最も数が多い。少数派の帰還の進展がみられないため、手続きを改善して政策通り実行するよう、緒方弁務官は求めている。かつてセルビア人少数派が多く住んでいたクライナ地域を訪れたが、帰還はほとんど進んでいない。

7日、クロアチアの首都ザグレブでの記者会見で緒方弁務官は、旧ユーゴスラビア諸国での難民・避難民問題には、地域全体をふまえたアプローチが必要だと訴えた。

8日、緒方弁務官はセルビアに移動し、ボイボデナ州でセルビア人人気歌手G・バラセビッチと会う予定である。バラセビッチは、地域全体における民族融和と難民の帰還をすすめるために、UNHCRへの協力を約束している。

(98年4月8日現在)

UNHCR職員 ロシア連邦で誘拐される

1月29日の深夜、ロシア連邦内の北オセチア共和国の首都ウラジカフカスにあるUNHCR現地事務所の所長が、拳銃を持った覆面姿の3人の男たちに誘拐された。フランス出身のパンサン・コシエテル所長(37歳)は、現地当局者との会食後、現地職員の運転で帰宅時に玄関で襲われた。犯人たちは、二人を所長宅内で縛り上げた後、貴重品を物色。その後、運転手を残し、所長を連れ去った。UNHCRの車も持ち去られたが、後に市内に乗り捨てられていた。

3か月近くたった今も、犯行声明はなく誘拐の動機も不明。UNHCRはロシア連邦と共和国政府に度重ねて早期解放にむけた協力を依頼したが、行方に関する有力な手がかりはまったくない。

4月29日、UNHCRジュネーブ本部職員は、黄色の花をつけて早期解放を求める無言行進を行なう。頻発する人道援助スタッフの誘拐・監禁に抗議し、全員の無事を願って世界各地で一分間の黙とうがささげられる予定。

(98年4月20日現在)

Campaign Report/Information

全日本新体操クラブ連盟

'97 イオンカップ 世界新体操クラブ選手権

昨年9月12日から4日間、「'97イオンカップ世界新体操クラブ選手権」が、全日本新体操クラブ連盟(二木英徳会長)の主催で開かれた。世界28の国と地域から選手が参加し、連日、華麗な演技で会場を魅了した。

94年から始まったイオンカップは、参加選手の総意で難民の子どもたちの支援を行なってきた。会場募金や入場料収益から、これまでに総額約

400万円がUNHCRに寄せられている。

特別協賛団体であるイオングループ ジャスコ(株)岡田元也代表取締役社長は「スポーツは平和の象徴です。(略)平和についての認識をあらたにしていただけの大会となれば」と語っている。

写真提供:全日本新体操クラブ連盟



個人総合ジュニアの部で優勝したカヴァ・エヴァ(ロシア)選手から難民の子どもたちへの義援金目録を受け取るトローラー-UNHCR 日本・韓国地域代表

チーズ普及協議会・
日本輸入チーズ普及協会

チーズフェスタ'97

11月11日が「チーズの日」であるのをご存知ですか。92年からこの日を記念して、「チーズフェスタ」がチーズ普及協議会・日本輸入チーズ普及協会の主催で毎年開かれている。昨年も「チーズフェスタ'97」が開催され、会場には世界各国からの約200種類のチーズが並べられ、チャリティー販売も行なわれた。

例年、チャリティー販売の収益金が「みどり一本」(スーダンでの再植林活動)運動に寄せられ、これまでの総額は約600万円にのぼっている。

©F. Naylar



「みどり一本」運動の支援によって育てられた主要道路沿いに広がる再植林地帯。スーダン東部の町ワド・アワド付近。

世界連邦宣言自治体全国協議会

自治体職員 一人 100円募金

「あらゆる差別、搾取、圧迫から人類を救い、世界の恒久平和を築くために、世界の人々が人間として、地

球市民として、国境を越えてお互いに連携し、新しい世界秩序を構築していこう」というのが世界連邦運動の趣旨。この運動は、国内322にのぼる世界連邦宣言自治体によって組織される同協議会が展開している。

協議会では86年以来毎年、自治体

職員に難民募金を呼びかけ、98年までに総額8100万円をこえる支援をUNHCRへ寄せてきた。

日米アースアクセス委員会

5000個の募金箱を 全国に

「一人一人の想いが、世界の難民を救います」と書かれた募金箱。これは、日米アースアクセス委員会(E.A.C.)の趣旨に賛同した信越ポリマー(株)の協力で制作されたものだ。E.A.C.は、92年、デザイナーの古賀賢治さんが中心となって設立した市民ボランティア団体。難民救済・地球環境保護・自然災害の救護活動をキーワードに

活動している。これまでもUNHCRに資金協力を行ってきたが、さらに募金活動のシステム化をめざして、企業を中心に募金箱とポスターを配布し、募金を呼びかけている。

写真提供：日米アースアクセス委員会



日本女子テニス連盟

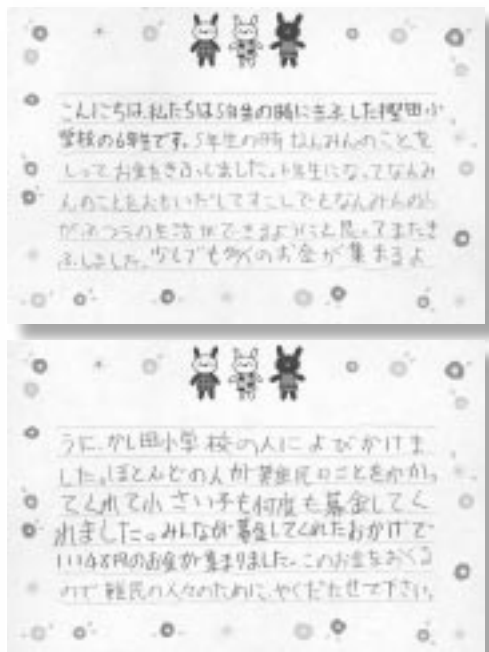
国連難民対策募金

91年、日本女子テニス連盟(井上早苗会長)は、全支部結成25周年を迎え、「健康でテニスを楽しめる幸せを気の毒な方々に向きたい」、それと同時に

緒方貞子 国連難民高等弁務官を支援しようと約3万人の会員に呼びかけ募金活動を始めた。以来、現在までに合計約800万円の寄付を、旧ユーゴスラビアの難民・避難民やソマリア難民、ミャンマー難民の援助のためUNHCRに贈ってきた。

お便りから

昨年、大阪府高槻市立榎田小学校では5年生(10人)が難民について学んだ。「難民援助に役立たせて」と、自分たちで育てた米を売って、それをUNHCRへ寄せてくれた。今年もみんなで難民について調べて、授業で発表。校内にポスターを貼り、全校生徒(37人)に支援を呼びかけた。



お知らせ

UNHCRへの寄付に対する 免税措置について

いつもUNHCRの難民援助活動にご支援いただきありがとうございます。

現在、残念ながらUNHCRへのご寄付は免税措置を受けられません。これは現行の日本の法律のもとでは、国連機関に対する寄付が免税措置の対象とされないためです。

免税措置を特にご希望の方には、UNHCRへの支援を目的に設立された「難民救済民間基金」をご案内しております。詳しくは、資料をお送りしますのでUNHCRまでお尋ねください。また、日本語版ホームページでも紹介しております。

UNHCR日本・韓国地域事務所 広報室

読む資料・見る資料

さしあげます

季刊誌

「難民 Refugees」—— 難民問題の現状と保護・援助のあり方をめぐる情報誌。特集には難民保護と国際社会の対応、人道援助活動をめぐる将来の展望など、各層の視点を紹介します。

パンフレット

1 難民女性とは—— 難民の8割をしめるのは女性と子ども。暴力の犠牲となりやすい女性たちの実態を取り上げます。

2「リーフレット」—— UNHCRの活動や難民問題の解決方法などを、イラスト入りで簡単に紹介しています。

「わたしたちの難民問題」—— 大学生などUNHCRの若いボランティアが中心となって高校生向けにつくった入門書。（「僕たちの難民問題」改訂版）

「難民問題の手引き」—— 「難民問題の現状」「地域別にみる難民問題」「UNHCRの活動」などを教師向けにまとめました。サイズ変形A5版

「難民の子どもたち」—— どうして難民になったのか、逃げる途中でどのような経験をしたのか、キャンプではどんな生活を送っているか、そして将来の夢など、子どもたちの声が聞こえてきます。小学生から高校生向け（20頁）

1. **ポスター 2種類**—— 世界の難民の子どもが描いた絵画から、アフガン難民（12歳）とスーダン難民（17歳）の作品2点を選んでポスターにしました。サイズA2（42×59cm）

2. **ポスターセット**—— 難民地図、UNHCRや難民などについての説明と写真で構成したセット。10枚一組。サイズA2（42×59cm）

UNHCR 早わかり

UNHCR 早わかり（最新版1997年11月発行）
UNHCRの概要

ニュースレター

UNHCR News（現在の難民の状況とUNHCRの援助活動）

募金箱

難民援助の募金にご協力ください。
ボール紙製 8.5×18×13cm
プラスチック製 8.5×18×13cm
プラスチック製は折りたたみ不可
詳しくはお問い合わせください。

お貸しします

展示用パネル—— 文字、写真パネル、世界難民地図を合わせ20枚が一組です。（68×47cm）貸し出し希望期間、使用目的、主催者をお知らせください。（ご要望が多いため、2か月前にはお申し込み下さい。）

ビデオテープ

1（日本語吹替え版・字幕版）
ほんのちょっと変えてみよう（14分）

2（日本語吹替え版）
世界の難民はどこに'95（19分） 難民女性（13分）

3（日本・韓国 地域事務所制作）
難民もみんな同じ地球人（19分）中学生向き

UNHCR日本・韓国 地域事務所はホームページを開いています。ぜひご活用ください。
<http://www.unhcr.or.jp>

お問い合わせ先

UNHCR日本・韓国 地域事務所
広報室

〒107-0052 東京都港区赤坂 8-4-14
TEL03-3475-4882
FAX03-3475-4884

資料や募金箱は、基本的に無料です。ただし送料と資料枚数の多い場合はコピー代がかかります。広報室宛に、ご質問も含めて官製はがきでお申し込みください。できる限り着払い（宅急便または郵便小包）をお願いいたしますが、ご無理な場合、送料分の切手を、資料受け取り後、同封の受領証と共に広報室宛てにご返送ください。

UNHCRニュース NO.6
1998年5月

発行
UNHCR日本・韓国 地域事務所
広報室
郵便振替
口座番号：00130-4-59734
加入者名：UNHCR

表紙写真 左上：UNHCR/J.Davies 右上：UNHCR/T.Bølstad
表紙写真 左下：UNHCR/A.Hollmann 右下：UNHCR/A.Hollmann